

「労働」に関する教育の必要性

一年二組 北村 優子

筆者が言うように、私たちは社会の中で生き延びるために労働をするのだと私は考える。なぜなら、税金を払うためにも、物やサービスを買つたり利用したりするためにもお金が必要であり、そのお金を得るために労働かなければならぬからである。

現在は正規雇用以外にさまざまな雇用形態が増えてきた。パート、アルバイト、派遣などのいわゆる非正規雇用である。以前より職を容易に変えることができるようになったとはい、非正規雇用だと正規雇用よりも安定性が低く、労働条件も悪い。このような雇用が増えれば、人々はあまりお金を使わなくなり、経済にも影響しかねない。また、正社員ではないため、自分たちがその会社の一員であるということを人々は意識しづらくなる。だから、若者の働くことへの意識の低さが最近は問題になっている。例えば、あるコンビニエンスストアでアルバイトをしていた若者が勤務中にアイスクリームが保存されている冷凍庫に入り、その入った姿の写真をソーシャルネットワーキングサービスに投稿したという事件が起きた。この事件のみならず、こうした非常識な行動をした若者が相次いだのである。

この問題を解決するためには、第一に働くことへの意識を変えなければならぬ。しかし、社会人になつてからだと自分一人で変えることは難しいだろう。だから、義務教育もしくは高等教育の間に、労働することの意義を教えることが必要であると私は考える。日本では高校一年生からアルバイトをすることもできる。だからこそ、学校で労働について考えさせることがとても大切なのである。

「労働」を耐えぬくメンタリティを

一年二組 手塚 奏

私は筆者と同じく、多くの他者に利益として分配されることを求めるような「特異なメンタリティ」こそが労働のあるべき姿であると考えている。また、どんな理不尽な条件でも耐えぬくメンタリティが労働者には必要だ。

最近はやりがいのある仕事を求めて離職・転職する若者が多いが、それはただの甘えだと思う。物が溢れた時代に生まれ、我慢することを知らない今の若者は一度壁にぶつかるとすぐに安易な方向へと逃げてしまう。やりがいのある仕事を求めるという理由で嫌なことから逃げているだけなのだ。

どんなにがんばっても出世できないなど社会にでれば理不尽なことはいくらでもある。しかし、自分ではがんばっていても、その努力が他者に認められなくては意味がなく、だからこそ私は理不尽をすべて飲み込む必要があると考えている。そうすることが他者に評価され成功する一番の近道なのだ。

若いうちの労働は買ってでもしろとよく言うが、いまの若者のようなりセツト世代にはこれが通用しない。今が良ければよい、失敗すればまたゲームのようリセットボタンを押せばいい。これがリセット世代の考え方だ。彼らは自分の利益を最優先し、自分の努力がすぐに結果に出ることを望み、極力無駄を省こうとする。だから彼らは自分にあわないとすぐ逃げるし、自分への直接的な利益にはならない他者や組織への貢献を嫌うのだろう。元プロ野球選手の野村克也は、いきなり大きなことにチャレンジするよりも、当たり前のようにできる基本的なことをしつかりとやることが大きなことにチャレンジする際の鍵になるという。

一見無駄に見える他者や組織への貢献、上司からの理不尽な要望などすべて意味のあることであり、「特異なメンタリティ」こそが労働のあるべき姿だと私は考えている。